



分科会 2 薬学教育は新たなステージへ ~医療人として求められる薬剤師の基本的資質~

10月7日(日) 15:00~17:30 第2会場(アクトシティ浜松 コンgressセンター 3F 31会議室)

W-02-05

薬物治療モニタリングとチーム医療への参画から見えてくる病院実務実習

かたやま としや
片山 歳也

四日市社会保険病院・薬剤部

【はじめに】平成22年度から薬学長期実務実習が開始され、薬学生への臨床現場における実践的な能力育成が指導薬剤師に期待されている。薬学生が講義や事前学習で学んできた知識・技能・態度を、臨床現場で適合させ、育成するという観点では、薬剤師の医療人としての責務(役割)を体験し、その本質を理解させる必要がある。特に病院薬剤師の役割を理解するには、チーム医療における薬剤師の役割とその貢献を理解することが重要であると考え。そのためには、医療安全に基づく調剤・投薬、医薬品情報提供および薬剤管理指導業務の在り方について、臨床の最前線で学べる環境整備が指導薬剤師に求められると考える。さらに、平成24年度診療報酬改定から開始された病棟薬剤業務を学ぶことも、病院薬剤師の医療への貢献を理解する上で重要と考える。

【病院実務実習内容】当薬剤部では病院実務実習ワークブック(じほう社)を使用し、薬物治療モニタリングとチーム医療への参画に重点を置き、処方参画できる薬剤師育成を目標として実務実習を展開している。進行スケジュールについては、より早期に病棟業務を体験していただき、患者目線から調剤・投薬、医薬品情報提供および薬剤管理指導業務を見つめてもらうように工夫している。薬物治療モニタリング能力向上には、診断過程および病態と薬剤に関する知識向上と、薬物治療における臨床効果・副作用の判断能力向上が必須となる。学生が病院実務実習で遭遇する症例の病態や薬物治療に関する知識については、調べて日誌に記載するよう指導している。また、調べた内容については単なる暗記ではなく、病態や薬効・副作用発現のメカニズムについて、説明できるよう推奨している。さらに、薬物療法の評価として、患者の訴えやイベントについて、病態と薬の両側面から考える力について学生に習得してもらうよう、バイタルサイン、血液検査結果、画像診断に関する時系列の推移データを考えてもらうようにしている。そして、学生が症例プレゼンテーションを複数の指導薬剤師の前で発表することで、成長の糧となることを実感している。

【病院実務実習の評価】平成22・23年度の実務実習では、無作為に選択した公開されているスケジュールよりもSBOsの組み込み数が全体で24%多い実習スケジュールを組み立てた。SBOs習得度の評価方法としてWebシステム(富士ゼロックス社製)を使用し、4週目、8週目、11週目の各実習期間終了時における学生の自己評価(n=6)および指導者(n=1)の学生に対する評価(3段階:最高3点)について、評価点数の推移並びにその関係について解析した結果、学生および指導者の評価点数は、実習が進行するに伴っていずれも有意に増加した(p<0.001)。学生または指導者と評価時点に交互作用はなく、学生と指導者間では評価に差はないことが認められた(p=0.467)。実習初期の学生の自己評価点数は指導者の評価点数よりも高く、そして実習後期の学生の自己評価点数は、指導者の評価点数よりも低くなる傾向が認められた。本結果より形成的評価を繰り返し行うことで、SBOsにおける学生の知識・技能・態度を向上させることができた。学生の傾向として、実習後期では実習初期に比べて厳しく自己評価していることが考えられた。

【今後の展望】病院薬剤師は医療安全を基盤としたチーム医療における貢献が求められており、病院実務実習では、病態変化と薬物治療の関係につき、考える機会を多く設けている。そして、チームカンファレンスや病棟回診にも積極的に参加してもらい、チーム医療の在り方について学ぶことができていると考えられる。さらに薬学生には、他の医療職種の特長をよく観察することで、チーム医療における薬剤師の在り方を開拓して欲しいと考える。最後に、薬学生により多くの機会を与え、指導薬剤師も共に成長すべきと考える。